

2025 年の思想の Keyword

私たちの尊厳のすべては、考えることのなかにある

(「パンセ, 仏 Pensées ; 宗教およびいくつかの問題に関するブレース・パスカル 1623-1662 の諸考察」より。“人間は自然のうちで最も弱い一本の葦にすぎない。しかし、それは考える葦である。”)

第4章「人間の尊厳」をめぐる円環構造 ― 死者の尊厳について―

昨年の10月、私の母校である札幌医科大学の解剖学講座永石歓和教授が主催する「献体」に関する市民公開講座“命をつなぐ贈り物～献体が拓く医学の未来”が開催された。その演者の1人として“献体の意義-人間の尊厳 (human dignity) 概念を考える”というタイトルで話をさせてもらった。最近日本では covid-19 pandemic を境に「献体」の希望者が減じ、将来的に医学教育、研究、そして医療技術の研修 (サージカル・トレーニング) に支障を来す懸念が開催の動機であった。かつて私も医学生時代に母校で「献体」による解剖学実習を受けておりその感謝の念もあり積極的に講演を受諾した。

私は緩和ケアにおける重要な課題の一つ「安楽死」問題を長年に亘り考察してきた。その帰結として、イマヌエル・カントの「人間の尊厳」概念が「安楽死」問題の主題であり、かつ「献体」の意志がその象徴的意義を表していると思うに至った。講演の最後に、「カントは、“人間が尊いのは自らを律して生きる自由を持ち、自分の幸せのため他人の幸せのためにも道徳的に行為するから”と説いている」と締め括った。

日本では「献体」後の遺骨に対し厳かに敬う文化がある。仏教に限らず宗教的な儀式を介しての固定的な通念である。この遺体に対する畏怖とそれらがもつ象徴的な力は世界に共通して存在している。すなわち、“敬意をもって遺体を扱う

義務がある”と言う普遍的な信念は道徳哲学における「死者の尊厳」という深い難問を提起する。例えば胎児の尊厳、臓器の売買、covid-19pandemic における看取り、さらに戦争、飢餓による死などに議論の場を拡げている。

2012 年ハーバード大学のマイケル・ローゼン教授による「尊厳-その歴史と意味. Dignity-Its History and Meaning」^{1) 2)} の中で、彼は「死者の尊厳」に関しカントの解釈を肯定的に記述し尊厳概念に一石を投じている。

尊厳の概念はさまざまな多様性の複合体である事はすでに述べた。³⁾ 第 2 次世界大戦後、尊厳の概念は人々の日常に留まらず政治的および法的な生活において基本的な位置を占めるようになった。例えば国際連合による世界人権宣言(1948 年)第 1 条の冒頭では“すべての人間は、生まれながらにして自由であり、かつ尊厳と権利において平等である”とし、ドイツ連邦共和国基本法(1949 年)第 1 条は“人間の尊厳は不可侵である”との文言から始まっている。しかし、その議論の中心はカントの観念である事に論を俟たない。カントは「道徳形而上学の基礎付け. Grundlegung zur Metaphysik der Sitten.1785」⁴⁾ において、“人間の尊厳の根拠となるのは自律であり、そして無条件で比較のできない価値を持つ道徳性のみが人間の尊厳を担保する”と明記している。そして人間は自律（人間自身が法律の源となる）を体現する道徳法を持つ故に尊厳は常に「人間の尊厳」であると説く。法は義務を伴いカントは、自己に対する義務と他者に対する義務、そして私たちが「人間の尊厳」に対する敬意を表明する義務を負うとした。これはすでに述べたように、どのようなものであれ自分に合った生き方を選んでいく個人の能力を自律とする現代の理解とは大きく異なるものである。⁵⁾

マイケル・ローゼン教授は、第 3 章「人間性(人間の尊厳)に対する義務」で、“私達が死者に対して尊厳をもって振る舞う義務があるのは何故か”と再び問い、カントが“人間の尊厳を敬う義務は、根本的には自己に向けられた義務である”としているが故に、その義務を果たす事なしに人間ではあり得ないと主張する。そして尊厳を敬う主体、すなわち遺された者の尊厳の保持は、死者に対して敬意を払うことにより始めて可能となると結論している。ここに「人間の尊厳」をめぐる

円環構造（最上のものを求め、巡り巡ってまたもとの出発点にもどる）を見てとれる。最近の報道で、ガザ地区の被災者が遺体を埋めた上に瓦礫の石を積んで祈りを捧げる姿が映像された。死者に対して敬意を払う、すなわち「死者の尊厳」を行為遂行することによって遺された者もまた人間の尊厳を保持することが可能となる姿であった。

「献体」の議論を契機にマイケル・ローゼン教授の著作「尊厳-その歴史と意味」を紐解いてみたが、彼はカントの“人間の尊厳の不可侵の神聖さ”を軸にして「死者の尊厳」を見事に演繹している。イマヌエル・カント研究にも秀でているマイケル・ローゼン教授の「人間の尊厳」の哲学的思考は私たちにとって大きな福音であった。

参考文献

- 1, Michael E. Rosen : Dignity: Its History and Meaning. Harvard University Press. 2012
- 2, マイケル・ローゼン : 尊厳-その歴史と意味. 内尾太一、峯陽一訳 岩波新書 2021 年
- 3, Yukie Ishitani : [IRS-SCPSC Newsletter New Year Special Issue \(BMJSPCare Blog Feb.15.2024\)](#)
- 4, Immanuel Kant : Grundlegung zur Metaphysik der Sitten.1785. (道徳形而上学の基礎付け. 御子柴善之訳 人文書院 2022 年)
- 5, Kunihiro Ishitani : Human dignity and Autonomy-The fallacy of Autonomy・Self-determination, and Right to self-determination – [IRS-SCPSC/ News Letter January. 2024](#)